

国民は、天皇の肉声を、はじめて聞いた。

「……国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ」

と、天皇が結ぶと、また、『君が代』が物悲しい調子で、鳴った。

「謹みて、天皇陛下の玉音放送を終わります」アナウンサーの声が続いた。「畏くも天皇陛下におかせられましたは、万世の為に太平を開かんと思召され、きのう政府をして、米英支ソ四国に対してポツダム宣言を受諾するむね、通告せしめられました」

「この未曾有の御事は、拝察するだに畏ききわみであり、一億均しく感泣いたしました。われわれ臣民はただただ、詔書の御旨を必謹、誓って国体の護持と民族の名誉保持のため、滅私の奉公を誓い奉る次第でございます……」

第二章 仕組まれた対米戦争の罠

日米開戦の嘘

なぜ、日本はアメリカと戦わなければ、ならなかったのだろうか。今日、多くの日本国民が、先の対米戦争について、軍部が暴走したからだだったとか、日本から仕掛けたと、誤って信じている。

たしかに、もし、対米戦争の最後の夏となった昭和二十(一九四五)年八月に、軍部の暴走を抑えることができなかったとしたら、本土決戦が行われて、日本は壊滅していた。

だが、昭和十六(一九四一)年には政府も、軍部も、アメリカと戦うことを、まったく望んでいなかった。戦争を回避しようとして、開戦の直前まで、真剣に努力した。

だが、アメリカは日本が真珠湾を攻撃したかなり前から、日本と戦って、日本を無力化することを、決めていた。

それなのに、国民の多くの者が先の戦争について、アメリカではなく、日本が責められるべきだと、思い込んでいる。

これは、事実にもっと反する。敗戦後にアメリカによって、歴史が大きく歪められてしまったためである。

過去の歴史を支配する者は、未来を支配することもできる。日本は先の戦争に敗れてから、自国の歴史を盗まれた国となってしまう。

歴史は記憶だ。記憶を喪失した人は、正常な生活を営むことができない。国家についても、同じことである。

ルーズベルト大統領の中国鼎肩

日米戦争は起るべくして、起ったのではなかった。その責任は、アメリカにあった。

対日戦争を戦ったフランクリン・ルーズベルト大統領は、昭和八(一九三三)年にホワイトハウスに入った。

ルーズベルトは、その前年の大統領選挙で民主党候補として、共和党のハーバート・フーバー大統領を破って、大統領に就任した。もし、この時、ルーズベルトが大統領にならなかったとすれば、日米戦争が起ることはなかった。

この時、アメリカは第一次世界大戦がもたらした惨禍に懲りて、もう二度とヨーロッパの戦争に巻き込まれてはならない、という孤立主義の世論に、支配されていた。

第一次大戦に参戦した過ちを、けっして繰り返してはならないという厭戦感情が、圧倒的な力を持っていた。第一次大戦は一九一八年に、終わっていた。

これは、今日の日本の平和主義によく似ていた。
ルーズベルト大統領が中国を愛して、日本を疎んでいたことが、日米戦争の大きな原因となった。

ルーズベルトの母のサラの父は、帆船時代の清朝末期に、阿片貿易によって巨富を築いて、香港にも豪邸を所有していた。サラは少女時代に香港に滞在して、中国を深く愛するようになった。

ルーズベルトは祖父が中国から略奪してきた、古寺の鐘や、屏風や、象牙、陶器などの高価な美術品に囲まれて育ち、幼少のころから中国に愛着を持っていた。大統領になっても、祖父が中国を広く旅行した話を、楽しそうに語った。

多くのアメリカ国民が、中国をアメリカの勢力圏のなかにあると、みなしていた。

中国は、多くのキリスト教宣教師をアメリカから受け入れていたし、アメリカ国民が「巨大な中国市場」を夢みて、中国に好意を寄せていた。ところが、日本は市場が小さすぎたし、伝統文化を守って、キリスト教文明に同化することを拒み、アメリカに媚びることがない、異質な国だった。

曲解された中華事変

昭和六（一九三一）年に、満州事変が勃発した。満州は万里の長城の外にあって、歴史的に満族の地であり、中国の一部ではない。万里の長城を越えて侵入して、中国を支配した、満族の王朝であった清朝のもとで、漢人の立ち入りが禁じられていた。

ルーズベルトはそれにもかかわらず、日本が中国を侵略したとみなした。

昭和十（一九三五）年に、ヨーロッパにおいて緊張がたかまると、アメリカ議会が世論に後押しされて、与党だった民主党の支持によって、中立法を制定した。中立法は戦争状態にあるか、内戦を戦っている国へ、兵器や、軍需品の輸出を禁じるものだった。

満州事変の翌年一月に、第一次上海事変が起って、日本から派兵されたが、五月に停戦協定が結ばれて、派遣軍が引き揚げた。

昭和十二（一九三七）年七月に、北京郊外の盧溝橋付近で、日中両軍が衝突した。盧溝橋事件だが、今日では中国共産党の挑発によるものだったことが、明らかとなっている。

明治三十三（一九〇〇）年の義和団事件以後、日英仏などをはじめとする諸外国の軍隊が、居留民を保護するために、駐屯する権利を得ていた。

翌月、第二次上海事変が始まった。その時、日本は上海の日本租界に、海軍陸戦隊を僅

か三千人だけ駐留させていた。

そこに、四十万人の国民政府軍が、襲いかかった。国民党軍の司令官だった張治中^{ちやうじちゆう}が、後に回想録のなかで、自分が中国共産党の秘密黨員だったことを、認めている。

ソ連は日本と戦うことを恐れていたために、中国共産党を唆^{そこのか}して、日中が戦うように仕向けていた。

日本軍が本国から増派され、戦闘が中国本土に拡大していった。

ルーズベルトは盧溝橋事件も、第二次上海事変も、日本が中国を計画的に侵略したと、曲解した。

日華事変は、日本から仕掛けたものではなかった。

戦後になって、日華事変は日中戦争と呼ばれるようになったが、日本も中国も、日米戦争が始まるまで、互いに宣戦布告をしなかった。事変と呼ぶのが正しい。

中国に派兵された義勇兵

ルーズベルト政権は、日本がアメリカに対して、いささかの害も及していなかったのにもかかわらず、日本を敵視した。

ルーズベルト大統領は、アメリカが中立国だったから、交戦国を直接援^{たす}けることができなかった。そのために、民間に「中国援助事務所」を設立させて、蒋介石政権が日本と戦うために、巨額の資金を提供した。

ルーズベルト政権は、中国へ惜しみなく、援助資金と、兵器、軍需物資を注ぎ込んだ。多くのアメリカ国民が、蒋介石総統とその宋美齡夫人がキリスト教徒だったために、キリスト教国である中国が、異教の日本による侵略を蒙^{こうむ}っているとみなした。

蒋政権はアメリカの世論を工作するために、アメリカのマスコミヤ、大学、研究所に、ふんだんに資金をばら撒いた。

蒋介石政権は昭和十二（一九三七）年に、アメリカ陸軍航空隊のクレア・シエンノート大尉を高給を払って、軍事顧問として雇った。

翌年、シエンノートは大佐として、中華民國空軍航空参謀長に任命された。

シエンノートは、蒋介石政権に戦闘機と、アメリカ陸軍航空隊の現役パイロットを、「義勇兵^{ゴランテイ}」として、偽装して派兵する案を、ルーズベルト政権に提出した。ルーズベルト大統領はこの提案を、ただちに承認した。

これは、重大な国際法違反だった。シエンノートの航空隊は、機首に虎の絵を描いてい

たので、「フライイング・タイガーズ」として知られた。アメリカが戦闘機を供給した。中国の「青天白日」のマークをつけて、アメリカの「義勇兵」が操縦する「フライイング・タイガーズ」は、アメリカで大きく報道された。

ルーズベルト政権は昭和十四（一九三九）年七月に、翌年一月に失効する日米通商航海条約を、延長しないことを決定して、日本に通告した。日米通商航海条約は明治四十四（一九一一）年に、締結されたものだった。

また、この七月にアメリカは、石油、屑鉄くずてつの対日輸出を許可制にするとともに、航空用ガソリンの対日輸出を禁じた。

九月に、ヒトラーのドイツがポーランドに侵攻することによって、ヨーロッパで第二次大戦が勃発すると、アメリカはただちに中立を宣言した。

ルーズベルト大統領はラジオ放送を行って、「私はアメリカを戦争の局外に置きたい。私に力がある限り、アメリカの参戦を防ぐ」と、述べた。

十月に、アメリカ陸海軍の暗号解読班が、日本の外交暗号をすべて解読することに成功した。日本の外交暗号を「パープル・コード」と名づけ、解読機械を「パープル・マシーン」と呼んだ。

アメリカは、日本政府の手の内を、刻々と知ることができるようになった。

十二月に、ルーズベルト政権は対日禁輸物資に、航空機の生産に欠かせないアルミニウム、マグネシウム、モリブデン、航空用ガソリンのプラント、航空用ガソリンの生産に役立つ考案、専門的情報を追加した。

ルーズベルト大統領は、モーゲンソー財務長官を側近として、もつとも信頼していた。

モーゲンソー財務長官は、日米が開戦した昭和十六（一九四一）年のちょうど一年前に当たる十二月七日（アメリカ東海岸時間）の日記に、大統領に対して「中国に長距離爆撃機を供給して、日本を爆撃するべきだと提案したところ、大統領が私に『中国が日本を爆撃するなら、大いに結構なことだ』と、語った」と、書いた。

陸海軍合同委員会によって、日本本土奇襲爆撃計画が立案され、「JB-355」という作戦名がつけられた。

昭和十五（一九四〇）年一月に、日米通商航海条約が失効した。日本は通商の大部分を、失うことになった。

ルーズベルト大統領は五月十五日に陸海軍に、蒋介石政権に爆撃機を供与して、機体に青天白日のマークを塗って、中国機として偽装したうえで、アメリカの「義勇兵」に操縦

させて、中国の航空基地から発進し、東京、横浜、大阪、京都、神戸を爆撃する「J B 1 355」計画を提出するように、公式に命じた。

陸海軍合同委員会が、日本本土爆撃計画の実施へ向けて、詳細な準備を進めた。今日、公開されている作戦計画書によれば、目的は日本の「兵器および経済体制を維持するために必要な生産施設を根絶しにするために、日本の民需、軍需工場を破壊する」とされた。日本経済を破壊しようというのだ。

日本本土空襲のために、新型のボーイング B 17 大型爆撃機を使用することが、決まった。B 17 は四発で、航続距離が三千三百キロもあり、クワインテットの要塞^{クワインテット}と呼ばれていた。

極秘裏に発足した S R

昭和十五（一九四〇）年六月に、フランスが降伏して、ドイツがヨーロッパ大陸を席捲^{せつけん}した。この時から、イギリスは孤立無援の戦いを、強いられるようになった。

ルーズベルトはイギリスを救うために、アメリカをヨーロッパ戦争に参戦させることを強く願った。ところが、孤立主義が厚い壁となつて、立ち塞^{ふさ}がっていた。

そのために、日本にアメリカとの戦争を強いることを急いで、ヨーロッパの戦争に裏口から入ることを、企てた。

ルーズベルト政権は昭和十六（一九四一）年二月に、国務省のなかに日本と戦つて屈服させた後に、日本をどのように処理するか、研究する「特別研究部」スペシャルリサーチ・ディビジョンを、極秘裏に発足させた。日米が開戦する九ヶ月前のことだった。

特別研究部は部内では、スペシャル・リサーチの頭文字をとつて、「S R」と呼ばれた。私は一九六〇年代から七〇年代にかけて、対日占領に当たった連合軍総司令部や、大戦中の多くの政府幹部と、アメリカにおいて会つて、当時を回想してもらつた。そうするうちに、「S R」の存在を知つた。

日米開戦後に、国務省の特別研究部に陸軍が加わつて、戦後計画委員会となった。昭和十九（一九四四）年三月に、報告書がまとめられた。報告書には、天皇を占領下で在位させて利用し、日本政府を存続させて、間接統治すべきことが、盛り込まれた。

そして、日本をアメリカによる単独占領下に置いて、日本の徹底的な非武装化と、「民主化」を行い、日本が講和条約によつて名目的に独立を回復しても、アメリカの管理下に置くことがはかられた。

S R は、対日平和条約案を作成する作業にも、取り組んだ。

日本が敗れると、対日占領は戦後計画委員会による筋書きに、そつたものとなった。

対日講和条約第一次案では、日本がいつさいの軍事力を、永久に持つことを禁じたうえ、将来、日本の軍事力が復活することがないように、入念な予防処置が組み込まれた。

航空機は軍用機はもちろん、民間機も一機すら保有することを禁じ、戦略物資の貯蔵から、軍事目的を持つ研究、核平和利用に関する研究まで、いつさい許されなかった。

公職追放は一定の水準以上の者については、講和条約が結ばれた後も、永久に続くことになっていた。

そのうえ、日本を条約によって縛つただけでは、安心できなかったので、日本が軍備、軍需品の生産能力を持つことがないように、講和条約を結んだ後に二十五年間にわたって、国際監視団が日本全国に散って、監視することになっていた。

対日講和条約第一次案は、第一次大戦後にドイツに課せられたベルサイユ条約よりも、はるかに苛酷なものだった。マッカーサー元帥の総司令部は、この講和条約第一次案を下敷きにして、日本に新憲法を押しつけるように、指示された。

自国民まで欺いたアメリカの騙し討ち

現行の日本国憲法は、とうてい憲法と呼ぶことができない。憲法の形を装った、不平等条約なのだ。

昭和十六（一九四一）年に、戻ろう。日米交渉は四月に、野村吉三郎駐米大使がワシントン市内のハル國務長官の私邸をたずねて、会談することによって始まった。

野村大使はまた四月十六日に、ハル長官と会談した。五月中だけをとっても、ハル長官と二日、七日、十一日、十三日、十四日、十六日、二十日、二十一日、二十八日に会談を重ねたが、もちろん、見るべき進展がなかった。

ルーズベルト大統領が側近に、「日本をこころしばらく、あやしめてゆこう」と語ったことが、記録されている。ルーズベルトは赤兎をあやすという意味である、「ベイビー」という言葉を使った。

七月十八日に、陸海両長官が日本本土爆撃作戦「JB-355」計画書に、連署したうえで、大統領の手もとに提出された。大統領はこの作戦案を、その日のうちに承認した。

日本の機動部隊が真珠湾を攻撃する、五ヶ月前のことだった。

今日、ルーズベルト大統領が日本本土奇襲爆撃作戦を承認して、署名した文書が公開されている。十月一日までに、蒋介石政権に百五十機のB17爆撃機と、三百五十機の戦闘機

与して、中国の航空基地から発進して、東京、横浜の産業地域と、神戸、京都、大阪、
襲撃を加えることになっていった。

これは、アメリカ国民を欺いて、日本を騙し討ちにするものだった。

七月に、日本は仏印（フランス領インドシナ、現在のベトナム、ラオス、カンボジア）
のフランス当局の承認を取りつけたうえで、北部仏印に進駐した。

アメリカ、イギリスは、蒋介石政権に大量の兵器を、仏印を通して供給していた。日本
は前年八月に、フランス政府の同意をえて、援蔣ルートを遮断するために、南部仏印に進
駐していた。

今日、多くの専門家によって、日本が七月二十八日に北部仏印進駐を強行したことが、
日米戦争の引き金を引いたと、信じている。

だが、ルーズベルト大統領は、その十日前に、日本本土爆撃作戦を承認していた。

ところが、この日本本土奇襲爆撃作戦は、ヨーロッパ戦線が急迫して、大型爆撃機をイ
ギリスに急いで回さなければならなくなったために、中国への供与が遅れることになり、
実施されなかった。

今でも、ほとんどのアメリカ国民が、真珠湾攻撃が卑劣な騙し討ちだったと信じている
が、これこそ、騙し討ちとなったはずだった。

日本を追い詰めた経済封鎖

アメリカは八月に、石油をはじめとする戦略物資の対日全面禁輸と、在米日本資産凍結
を強行した。この時点で、日本には石油の貯蔵量が民需を含めて、二年分しかなかった。

日本は石油を、アメリカからの輸入に依存していた。当時、アメリカは世界最大の産油
国だった。陸海軍にとって、一日一日、燃料が逼迫していった。石油の供給が断られたた
め、日本経済全体が立ち行かないことになった。

日本に戦争の第一発目を撃たせようとして、日本の喉元を、絞めあげたものだった。

トルーマン大統領によって極東米軍最高司令官を罷免されて、帰国したマッカーサーは、
昭和二十六（一九五一）年五月三日に、アメリカ上院軍事外交合同委員会において、「日
本はアメリカの経済封鎖によって、やむにやまれず自衛のために、戦わざるをえなかつ
た」という証言を行った。

日本は占領下にあったから、このマッカーサー証言が、日本で報じられることはなかつ
た。

マッカーサーは、アメリカが工業国にとって不可欠な石油や、屑鉄などの原料の対日禁輸を行ったことに触れて、「彼ら（日本）は、もし、これらの原料の供給が断ち切られたら、一千万人から千二百万人の失業者が発生することになるのを、恐れていた。したがって、日本が戦争に飛び込んで行った動機は、その大部分が、安全保障の必要に迫られていることだった」と、述べた。

陸海軍は日米交渉が始まった時点では、日米関係が悪化しつつあったものの、まだ、対米戦争にまでなるとは、深刻に考えていなかった。もちろん、陸海軍も日米交渉が成功することを、強く期待していた。

想定していなかった戦争

日本は対米戦争を、まったく準備していなかった。

もし、対米英蘭（オランダ）戦争となれば、当然、この三ヶ国の東南アジアの植民地が、戦場となる。

それまで、陸海軍は太平洋の欧米の植民地や、南の島々において戦うことを、予想していなかった。日本の国力からいって、そのような戦争を想定することが、できなかった。

もし、日本が早い時期から、アメリカと戦うことを計画していたとしたら、サイパンや、テニアン、トラック島をはじめとする、第一次大戦後に日本の委任統治領となった島々を、要塞化していたはずである。

ところが、開戦後の昭和十九（一九四四）年まで、南洋諸島に防備を施すことが、まったくなかった。

もし、これらの島々に十分な時間をかけて、防備を施していたとすれば、アメリカ軍が来攻した時に、もっと頑強に抵抗できたから、短期間で奪われなかったはずだった。

陸軍は南方作戦についても、まったく準備していなかった。

陸軍がマレー半島、フィリピン、ビルマ（現ミャンマー）、蘭印進攻作戦の研究に着手したのは、開戦の九ヶ月前の三月のことだった。海軍にいたっては、僅か四ヶ月前だった。それまで、陸軍はジャングル戦に備えた訓練を、一度も行ったことがなかった。

開戦が決定されれば、進攻することになる地域について、かならず事前に用意される詳細な地図も、自然や、現地の風俗などを調査した兵要地誌も、なかった。

日本はあまりにも準備不足だった。陸軍はもっぱら宿敵として見立てたソ連との戦争に備えていたし、海軍はアメリカと日本海海戦のような艦隊決戦を戦うことしか、想定して

いなかった。

そのために、対米戦争を始めるのに当たって、緒戦で勝利を収めたうえで、占領地域を固めて、不敗の態勢を確立すれば、アメリカがそのうちに戦意を喪失して、講和が結ばれるだろうという、きわめて曖昧な結末しか描けなかった。

ルーズベルト政権の陰謀

ルーズベルト大統領は日本と戦うことを決めていたので、日米交渉が妥結することを望んでいなかった。

日本政府はアメリカも日本と同じように平和を望んでおり、緊迫しつつあった両国関係を緩和することを、当然望んでいると考えた。

アメリカも日本と同じように、誠がある国だと、思い込んでいた。

日本は罾わなに掛けられた。ルーズベルト政権による陰謀にはめられ、絶壁まで追い詰められて、やむにやまれず開戦に踏み切った。

日本はアメリカが、日本のほうからアメリカに戦争を仕掛けてくるように、企たくらんでいたのに気付かず、政府と軍をあげて独り芝居を演じていた。

独り芝居とは「相手がいないのに、いても相手にかまわずに、自分勝手に思い込んで夢中になって、一喜一憂しながら振る舞うこと」である。

十一月三日に、東京にいたジョセフ・グルー駐日米大使は國務省に宛てて、もし日米関係が緩和されなければ、「日本に『全力をあげてやるか、死ぬか』、外国の圧力に屈服するよりは、事実、国家的ハラキリを冒おかさせることになる。日本の国家的資質と心理を知っている観察者（グルー）は、この偶発事項が起らぬばかりか、ありそうなことだと了解している」と、報告している。

真珠湾攻撃の十二日前の十一月二十五日に、ルーズベルト大統領がホワイトハウスに、ハル國務長官、ステイムソン陸軍長官、ノックス海軍長官、マーシャル参謀総長、スターク海軍作戦部長を召集して、会議が行われ、「アメリカに過大の危険を招かぬように配慮しつつ、日本のほうから攻撃せざるをえないように仕向ける（The question was how we should maneuver them into the position of firing the first shot without allowing too much danger to ourselves.）」と、合意した。

アメリカは十一月二十六日に、それまで日米の交渉によって積み上げてきた、合意の一際を否定する、『ハル・ノート』を日本に突き付けた。

今日、歴史家の間では、日本が受け入れることが絶対にできないことを知りながら、「ハル・ノート」を手交したことが、定説となっている。

野村駐米大使と来栖^{くるま}三郎大使は、ワシントンにおいて覚書を受け取った時に、目を通してから、「絶対不可能な条項を含んでいる本案を、このまま本国政府に伝えるべきかどうか、迷う」といって、強く抗議した。

東條内閣の閣僚のなかで、もつとも和平を強く求めたのが、東郷茂徳外相だった。東郷外相は「ハル・ノート」を受領した時に、「自分は目も眩^{くら}むばかりの失望にうたれた」と、回想している。

グルー大使は東京の大使館で「ハル・ノート」を読んで、「戦争になるボタンが、押された」と、日記に記した。

東郷外相は和平派であったのにもかかわらず、戦後、A級戦犯として投獄されて、獄中で病死した。東郷は朝鮮人だった。戸籍を見ると、朴茂徳^{パクムトク}として鹿児島で生まれ、東京帝国大学（現在の東京大学）法学部の入学試験に合格した時に、姓を日本名の東郷に改めた。東郷は獄中で回想録を執筆したが、「米國を指導者としての対日経済封鎖のみならず、軍事的包圍陣も日に日に強化され、その（日本の）生存が脅かされたので、もはや立ち上

がる外ないと云うことだった」「『ハル』公文を受諾した後の日本の地位が、敗戦後の現在の地位と大差なきものとなるべきであることは、疑いの余地はない」と、述べている。

東京裁判においてインドを代表したバル判事は、二十八人のいわゆるA級戦犯全員について、無罪であるという判決書を提出したことによって、有名である。

バル判事は判決書のなかで「ハル・ノート」について、「これと同じ通牒^{つうてい}を受け取った場合には、モナコ公国か、ルクセンブルク大公国のような小国でさえも、アメリカに対して武器を手にして、立ちあがったであろう」と、強く非難している。

真珠湾攻撃と独り芝居の終わり

十二月七日（ハワイ現地時間）早朝に、真珠湾から北二百マイルまで迫った六隻の空母の甲板から、飛行甲板の両側に並んだ乗組員が歓呼するなかを、第一波攻撃隊の百八十三機が真珠湾を目標して、一機また一機、離艦していった。

真珠湾を攻撃することによって、日本の独り芝居が終わった。

野村大使は二月十一日にワシントンに着任してから、ルーズベルト大統領と、十二月七日まで十回、ハル長官と六十回にわたって会談した。ルーズベルトも、ハルも、日本に對

してあたかもアメリカが誠意をもって、交渉しているようにみせかけた。

後に、ステイムソン陸軍長官がこの日について、「私は日本が真珠湾を奇襲したという、最初のニュースが届いた時に、何よりも、まずほっとした。

真珠湾における損害の報告が、刻々と入ってきて、急速に大きくなっていったにもかかわらず、私はそのあいだ中、深い満足感にひたった」と、記している。

真珠湾が劫火（うしひ）に包まれることによって、日本の独り芝居が終わった。

ルーズベルトは日本を計画的に挑発して、アメリカを攻撃させ、日本に自殺を強いることに成功した。ルーズベルトは、魔術師だった。

日本では十二月八日午前六時に、ラジオからアメリカ、イギリスに対して戦争状態に入ったことを知らせる、臨時ニュースが流れた。

「臨時ニュースを申し上げます」というアナウンサーの声に続いて、「大本営陸海軍部発表 帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり」という、短い発表が流れた。

この日の夜、東條首相は午後七時から首相官邸の食堂において、杉山参謀総長、永野軍令部総長、嶋田繁太郎海相、星野直樹書記官長などの政府、陸海軍幹部を十八人夕食に招

いた。厨房で用意された中華料理が供された。

席上、東條首相は海軍側から真珠湾の戦果が発表されると、相好（あうこう）を崩して、「予想を大きく上回る。これでいよいよ、ルーズベルトも失脚だね」といって、喜んだ。

すると、杉山参謀総長が「先ごろ、石清水八幡（いしづみ）に参拝したが、その時、こんどの戦争に神風の助けを借りなくて済むようにと、祈ったよ」と、いった。

リンドバーグの日記

この時、アメリカのなかに、ルーズベルト大統領が日本に戦争を強いたと、信じた人々がいた。そのなかの一人が、一九二七年に愛機『スピリット・オブ・セントルイス』を駆って、大西洋の横断飛行にはじめて成功することによって、アメリカの国民的英雄となっていた、チャールズ・リンドバーグだった。

リンドバーグは、日本が十二月七日（ハワイ時間）に、真珠湾を攻撃した翌日の日記に「日本の奇襲攻撃は、驚くには当たらない。われわれは何年にもわたって、彼らを戦争に駆り立てていたのだから。彼らはただ単にわれわれの横っ面を、張り飛ばしただけに過ぎない」と、書いた。

ルーズベルトの前任者だった、ハーバート・フーバー大統領は回想録『裏切られた自由』^{フリーダム・ビトレイド}のなかで、昭和二十一（一九四六）年に占領下の日本を訪れて、マッカーサーと会った際のことを、次のように述べている。

「私はマッカーサー元帥と、五月四日の夕刻に三時間、五日の夕刻に一時間、六日の朝に一時間の三回、二人だけで話した。

私が対日戦争のすべての責任が、戦争にもつてゆこうとするルーズベルトの狂人の野望^{マッドマンズ・デザイア}から発したと述べたところ、マッカーサーも同意した。

また、一九四一年七月の資産凍結が、挑発的であつたばかりではなく、凍結が解除されなければ、自殺行為になつたとしても、戦争をせざるをえない状態に、日本を追い込んだと、述べた」

「ルーズベルトが犯した壮大な誤りは、日本に対して全面的な経済封鎖を行つたことだつた。経済制裁は弾こそ撃つていなかったが、本質的には戦争であつた。ルーズベルトは、自分の腹心の部下からも、再三にわたつて、そのような挑発をすれば、遅かれ早かれ（日本が）戦争を引き起こすことになる」と、警告を受けていた」

第三章 大東亜会議と人種平等の理想